

## 大石 和欣：『家のイングランド—変貌する社会と建築物の詩学—』

名古屋：名古屋大学出版会, 2019. v + 406pp.

---

滝川 睦

---

ロンドンのテート美術館に所蔵されたウィリアム・ラトクリフの油絵『ウィルフィールド通りから見たハムステッド・ガーデン・サバーブ』（1914年頃）。テート美術館の公式サイト曰く、ラトクリフの絵画は町の生活と田園の生活の利点を融合させたガーデン・サバーブの理想を強調している、と。19世紀末から20世紀初頭のロンドン郊外と田園都市のトポスを、考察の射程に入れた本書のカヴァー図版として、この絵はまことにふさわしい。しかしテートの公式サイトが見逃しているのはこの絵が線遠近法に基づいて描かれているにも拘わらず、肝心の線が引かれないうで、パステル調の緑色、薄紫色、藍色など、おぼろな色のグラデーションがその「線」を織り成している点である。そのような色によって引かれた「線」は画布の中で揺曳し、流動し、ひとつの消尽点に収斂することはない。本書がその変貌を追う、郊外や田園都市のトポス、そして建築物の表象もやはり同様なのである。

本書のねらいは、19世紀後半から20世紀前半のイングランドにおける社会の変貌と建築物の詩学を、とくに「イングリッシュな家」の生成や表象に焦点を合わせて、歴史的視座から照射することである。そのさいに鍵概念として用いられるのが、ピエール・ブルデューが唱える「ハビトゥス (habitus)」である。著者の言葉を借りるなら、ハビトゥスとは、人間が「教育や階級、文化資本を通して構築される歴史的な生態的特性にしたがって、日常的な実践を行い、社会や文化の新たな形を創成していく」過程で、「個人的・集团的経験によって継続的に体内に刻み込まれ蓄積され」るものなのである (6)。そしてハビトゥ

スとして捉えられる建築は「ある時代の中に生まれ、その精神に育まれ、呼吸をし、熟成されていく生命体」なのであり、ハビトゥスとしての建築物は「それぞれの時代の空気や環境、文化を摂取して変容し、また時代に影響を及ぼす媒介物」である(296)。かつて『庭のイングランド』(1983年)を同じく名古屋大学出版会から上梓した川崎寿彦は、英国17世紀の建築を論じるにあたって、当時のカントリー・ハウスを、ルイ・アルチュセールの〈全的イデオロギー〉—「特定の社会の内部で、史的存在または役割を与えられた、イメージ、神話、理念、概念等の、<sup>ル・プレゼンタシオン</sup>表象の体系」(川崎48)—の概念を援用して分析したが、本書の著者が用いる「ハビトゥス」は人間の日常的実践や日常性と結びついた、より柔軟で動的な概念なのである。

「闇の奥の家—スラムをめぐるまなざしと表象—」と題された第1章においては、「イングリッシュな家」の空間および概念の背景に19世紀後半から20世紀前半のイングランドにおけるスラムの問題が存在していただけでなく、逆説的にスラムの問題こそが、ハビトゥスとしての理想的空間の概念や表象の再構築を促していたことを指摘する。チャールズ・ブースの「ロンドン貧困地図」(1889年)、エドウィン・チャドウィックの『グレート・ブリテンにおける労働者階級の衛生状態についての報告書』(1842年)、ヘンリ・メイヒューの『ロンドンの労働と貧困』(1848-49, 1861-62年)などの一次資料を精査して「スラムが中・上流階級の生活空間の内奥に、あるいは裏側に、密かに、しかし不気味な姿で、まるで病巣のように巣食っている」(29)様態を剔抉する。ロバート・ルイス・スティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏の奇怪な事件』(1886年)において、そしてブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(1897年)において描かれる、中・上流階級の邸宅と表裏一体となったスラムは、「ロンドン貧困地図」のスラムを再現＝表象したものである。

第2章「スラムに聳えるネオ・ゴシック建築—夢に終わった中世の理想—」では、前章で分析された貧困やスラムの問題を解決・救済する目的で、19世紀後半にイングランド国教会高教会派が中世の社会像を象徴するネオ・ゴシック建築物を建てていったこと、しかし結局そのような救済システムとしての中世主義は有効な実を結ばず、衰退していったことについて論じている。トマス・

カーライルや、『ヴェネツィアの石』（1851-53年）のジョン・ラスキン、そして『ユートピアだより』（1890年）のウィリアム・モリスが提示する中世主義が、貧困やスラムを見つめるまなざしにその起源をもっていること、18世紀イングランドの美学・文学の概念—「ゴシック」や「ピクチャレスク」—の変遷を、ヴィクトリア時代の建築や工場群に辿っている点が特に興味深い。

第3章「「混濁」した郊外と家—不可解な空間—」は、19世紀末から20世紀初頭に書かれた郊外小説の分析である。貧困とスラムを見つめる中産階級的なまなざしは、救済目的のために理想的中世社会に投げかけられるだけでなく、ロンドン郊外の田園へも向けられる。1870年代以降の30年間でロンドン中心部の人口増加が50万人に止まったのに対して、郊外の居住者が40万人弱から150万人へと膨れ上がった背景には、「イングリッシュな家」に憧憬する、そうしたまなざしが働いていたことを実証する。この章で扱われる郊外小説としては、ジョージ・ギッシングの『余った女たち』（1893年）、『女王即位五十年祭の年に』（1894年）、アーノルド・ベネットの『北部出身の男』（1898年）、E. ブロックの『ロバート・ソーナーロンドンの事務員の話』（1907年）、さらにはアーサー・コナン・ドイルの『四つの署名』（1890年）、そしてロンドン「郊外を流離う夏目金之助」（151）の足跡が刻むテキストである。郊外小説の分析によって明らかにされるのは、表象される郊外にしても、表象としての郊外にしても「常に流動しつづけるカオスの空間」（123）であること、その境界は絶えず移動し、住民たちは流離っていたこと、「郊外」にピクチャレスク概念が被せられ都市との距離が保たれることにより、都市内部の「病的で不健全な」（130）風景が隠蔽されたこと、そして郊外小説批判にその起源をもつモダニズム文学と、郊外小説との逆説的とも言えるような親近性である。

「イングリッシュな農家屋—遺産の継承と社会—」と題された第4章では、E. M. フォースターの『ハワーズ・エンド』（1910年）が分析の俎上に載せられる。その分析とは「家屋の内部に堆積する歴史の層、その積時性を掘り起こしていく考古学的考察」のことであり、本作品が描く「「家」に塗りこめられた「イングリッシュなもの」の構築を分析し、その「ハビトゥス」が磁場として発生する家の姿を時代のなかに追」うことである（179-80）。こうした分析を通し

て解明されるのは、『ハワーズ・エンド』は20世紀冒頭にエベネザ・ハワードが提案したような、農村と都市の折衷案としての田園都市計画や、1909年の「住宅・都市計画法」、政治家たちが推進した「田園回帰運動」などの考え方に同調するようであり、そうした考え方からは距離をとりつつ、「田園回帰運動」がユートピアとして構築する「イングリッシュな家」は幻想に他ならないと看破していることなのである。本作品が導き出すのは、ラスキンやナショナル・トラスト、そしてアーツ・アンド・クラフツ運動が主張したように「新しい精神が別の時代に吹き込まれば、それは新しい建物になる」(209)という考え方なのだ。

第5章「「空っぽの貝殻」—消えゆくカントリー・ハウスの幻影—」。イングランドにおいて1900年から1970年までの間に、約1500館ものカントリー・ハウスが消滅した社会現象を下敷きにしながら、本章は20世紀英国文学におけるハビトゥスとしてのカントリー・ハウス表象の衰退と瓦解について、とくに現前しながらすでに「空っぽの貝殻」(248)と成り果てていたカントリー・ハウスの崩壊に焦点を合わせて論じている。分析の対象となるのはオルダス・ハクスリーの『クルーム・イエロー』(原文ママ, 1921年)、D. H. ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』(1928年)のラグビー・ホール、ダフネ・デュ・モリアの『レベッカ』(1938年)のマンダレー、イーヴリン・ウォーの『ブライズヘッド再訪』(1945年)、そしてカズオ・イシグロの『日の名残り』(1989年)のダーリントン・ホールである。皮肉なことにカントリー・ハウスの消滅こそが、「イングリッシュな伝統」として郷愁を掻き立て、ナショナル・トラストによるカントリー・ハウスの再構築へと結びついていく過程が解明される。

第6章「建築物の詩学—ジョン・ベッチャマンと歴史的建築物—」は、生活文化の象徴であり、ハビトゥスでもある歴史的建造物の保存に尽力した国民詩人ジョン・ベッチャマンへのオマージュとでも言うべき章である。本書評の冒頭で「ハビトゥス」を説明するさいに用いた「それぞれの時代の空気や環境、文化を摂取して変容し、また時代に影響を及ぼす媒介物」という建築物の定義は、まさにこのベッチャマンの章から引用したものである。彼が礼賛し守ったものは、本書においてハビトゥスとして捉えられたヴィクトリア朝のネオ・ゴ

シック建築、「混濁」の美德」(301)を具現化した教会建築、そして郊外の鉄道駅や郊外住宅である。

このように「ハビトゥス」の概念を念頭に置きながら本書を辿り直してみると気づくことがある。それは「生きられた家」としての建築物の内部へ分析的まなざしが投げかけられることがあまりないことである。無論まったくないわけではない。夏目金之助の三番目の下宿部屋内部に向けられる著者のまなざしは確かに鋭い(158-60)。がしかし『日の名残り』を論じるさいに、ステイヴンズが佇み、そして立ち去る廊下、あるいは、お花を生けましょうとミス・ケントンが足を踏み入れる食器室などの「場」を分析の対象としてほしかった。「空っぽの貝殻」としての「家」を表わすにはうってつけの空間表象であるように思われるからだ。

ないものねだりの指摘をしたが、歴史と文学のインターテクスチュアリティについて新歴史主義批評以降の批評視座から徹底的に考究していること、ブルデューの「ハビトゥス」の概念を、とくに「積時性」や「経験の積層」(14)などの側面に力点を置きながら援用し、「変貌する社会と建築物の詩学」のダイナミクスを解析していること、英国18世紀から20世紀にかけての、美学・文学概念である「ゴシック」と「ピクチャレスク」の系譜を解明していること、これまでモダニズムを中心に論じられてきた20世紀前半の英文学に、郊外文学や、カントリー・ハウスの衰退と瓦解という斬新な視座から、解析の光を照射していることから判断できるように、本書がとりわけ優れた建築文学研究書であることは間違いない。

本書の魅力はもうひとつある。それは著者が「ハビトゥス」として論じた建築物を実際に訪れ、そこにしっかりと身を置いていることである。第2章冒頭で語られる、テート・ブリテン美術館近くのセント・ジェイムズ・ザ・レス教会訪問はそのよい例であろう。そして書評者は本書を手にとりながら、かつて著者が名古屋大学大学院文学研究科に同僚として身を置き、英米文学研究室と名古屋大学英文学会を支えてくれた日々を、懐かしく思い出している。

## 引用文献

川崎寿彦.<sup>スタイル・ポイント</sup>「静止点としての一七世紀カントリー・ハウス」.『薔薇をして語らしめ  
よ—空間表象の文学—』, 名古屋大学出版会, 1991年, 48-92頁.

Ratcliffe, William. "Hamstead Garden Suburb from Willifield Way," c. 1914, [www.tate.org.uk/art/research-publications/camden-town-group/william-ratcliffe-hampstead-garden-suburb-from-willifield-way-r1139027](http://www.tate.org.uk/art/research-publications/camden-town-group/william-ratcliffe-hampstead-garden-suburb-from-willifield-way-r1139027).